

平成二十一年二月一日発行（毎月1回1日発行） 通巻八二九号  
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

# 火星

平成二十一年二月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

お包みの嬰のくつつさめ初景色

初夢もなく起さるることもなく

柿の葉を出でし鮫の香四日かな

寄る鹿に鹿立ち上がる氷かな

ローソンの前にこぼれし寒雀

スリツパのきちんと脱いである障子

柚の皮を一片削ぎし雪もよひ

酒にほふ僧と出会ひし枯堤

雪暗の川沿ひをゆくチンドン屋

梅畑のかかりにありし鬼瓦

# 太白星

柳生千枝子

紅葉山より流れ出て水清し  
紅葉して木に棲むといふ女神見ゆ  
をさな児の声が紅葉の遊園地  
冬田はるか天を映して空の色  
人恋へば冬天高く煙立つ  
ひとりなる朝が始まる冬の百合  
師走とて心の何処も独りなり

杉浦典子

四股踏んでゐる子に銀杏降りしきる  
柚子ふたつもらひ両の手よろこべり

神の留守くぢらステーキ食うべけり  
神還りませし滝音滝しぶき  
蹠にみづかき蹤けり霜の岸  
擱みたる花かつをの嵩冬夕焼  
酒蔵の階の中減り十二月

浜口高子

綿虫と別れ芋汁熱かりし  
霜晴や抓みて凹む烏瓜  
古道具の間に顔や十二月  
文楽の太眉上下しぐれ月  
文旦に布裂く音を重ねをり  
ひとり夜の煎茶に開く返り花  
我がための湯豆腐踊りはじめたり

# 火星作品

## 山尾玉藻選

知らぬ鳥きて秋の水くぼませり  
大和郡山 城 孝子

角伐られ鹿に横顔ありにけり

焼藪の湯気のむらさき時雨くる

鳩潜ぐたびわがこころ丸くなり

わがため金の使ひけり木菟の夜

ともかくも歩きだすなり真葛原  
宝塚 蘭定かず子

立冬の路地に嗽のひびきけり

鷹の座の海へ張りだす一枝かな

屋上へ重き扉や虎落  
落 笛

冬うらら石のほひの粉葉

薪積む嵩に綿虫殖ゆるかな  
山本耀子

鴨発ちて湖の翳りのこりけり

胎内岩潜り抜けきてあられ酒

落葉焚きし跡濡れてをり馬の墓  
クリスマス頬赤き子を手まねきす  
冬夕焼馬が大きく頷ける  
息しろく馬が顔押す騎手の胸  
風音の聾学校の葱畑  
霜晴の堰霜濡れの赤のまま  
大火鉢に鉄瓶たぎるロビーかな  
馬上より声降りにけり水の秋  
エスカレーター―南京櫨の紅葉まで  
初時雨茶店のこゑの女づれ  
婆ふたり去にし四角き冬日向  
川ふたつ越えきし神農さんの虎  
獅子柚の影のこぼるる目筈かな  
夫を呼ぶ声を惜しまず霜の朝  
虻にまだ羽の音ある小春かな  
レグホンのころがるやうに柚の下  
厚着して日影より入る酒林

西宮 米澤光子

小林成子

河崎尚子

# 選のあとに

山尾 玉藻

りに殖え始めた「綿虫」の数も窺えて愉しい。「薪の嵩」と「綿虫」が殖えてきたことに関りはないが、そう感じるところが詩人なのである。

わがための金使ひけり木菟の夜 城 孝子

「わがための金使ひけり」と述懐するところに、自分だけの為に相当額の金銭を使ったことへの後ろめたさがある。「木菟の夜」がそのことを物語っている。どこか古風さが身に沁み込んでしまった年齢の女性特有の心理が描かれていて、ここに深く沁み入る。

鷹の座の海へ張り出す一枝かな 蘭定かず子

見事な屏風絵か襖絵を前にした時のように、一句に描かれた景の迫力に圧倒される思いである。選りすぐられた言葉で重厚で気品溢れる世界を生んでいる。

前掲句に描かれた世界と掲句に描かれた世界とは全く異質ではあるが、両世界共に私のところを擱んで離さない。たった十七文字の詩の素晴らしさを改めて思った。

薪積む嵩に綿虫殖ゆるかな 山本 耀子

日向に薪が積み上げられている冬支度の景であろう。「薪積む嵩に」の「嵩に」がなかなか巧みな表現で、薪の量の豊かさを感じさせるだけでなく、それに誘われたかのように辺

息しろく馬が顔押す騎手の胸 河崎 尚子

ここに描かれた馬は、恐らくレースを終えた馬か、調教を終えた馬であろう。「馬が顔押す騎手の胸」より、先ほどよりの緊張が解けたかのように、騎手に甘える馬の様子が見て取れる。騎手もまた白息で馬の仕草に応じてやっているのである。上五「息しろく」が微笑ましい情景を一層鮮明にしている。

婆ふたり去にし四角き冬日向 小林 成子

「婆ふたり」が去っていった後の「四角き冬日向」とは、読者はどんな日向を思うだろうか。私はすかさず神社や寺院の苑を思い、納得した。参詣を済ませた老婆二人が、日向の礎やベンチに座り込んで暫くおしゃべりをして帰ったのだろう。無論、公園やその他の日向を想像してもそれなりに愉しい。「四角き」の言葉のキャパシティを樂しめばよい。

夫を呼ぶ声を惜しまず霜の朝 米澤 光子

はりつめた空気の朝、ご主人を呼ばれる作者の声が温かくひびく。「声を惜しまず」とはなんと愛情のこもった表現であろうか。(以下略)



同人 I

城 孝子

# 恒星圈

木野本加寿江

養命酒空つぼのまま十二月  
年の瀬や一枚となるカレンダ―  
冬の壁吟道師範の免許状  
鏡台の上のかつらに師走くる  
壁布の大いなるしみ十二月

坂口夫佐子

声明や丸ごと黄葉の大銀杏  
腰の鈴鳴らして谷へ年用意  
樹の瘤に齡息づくそぞろ寒  
青空へ鷺を見送る網代守  
身に入むやお茶の香りの緋毛氈

大東由美子

鬼の子にあたたかな月上りけり  
消壺に消炭満てる神の留守  
冬に入る橋守に窓ひとつあり  
みのむしの反り身なりけり十三夜  
金魚田にうすき月あり十夜粥

柚子しぼる力加減でありにけり  
薄ら日の降り続くなり椎落葉  
薄き日の空の余白を返り花  
中空の余白うつくし返り花  
柿を取るための高枝切り鋏

高尾豊子

柚子味噌を褒めてくれよと男かな  
鴟日和きのふの湿り歩きけり  
お内儀の掃けども掃けども椎落葉  
神留守の月夜を鹿の歩きぬる  
帰り花身籠りし子といちご植う

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

助口弘子

渡辺数子

お百度を踏み来てくれし冬帽子  
もう癒えぬ夫の掌あたたかき  
凧や辻占ひに呼ばれたる  
ゆく年の地蔵並べる橋たもと

藤原冬人

岩井ひろこ

後ろ手に少女の佇てるちゃんちゃんこ  
冬ざれや丘の夕雲空へ出で  
かくれんぼの子のもどり来ず枯野道  
古里に暮すすべなし冬鷗

笠置早苗

かわばたとしお

コスモスの風コスモスを打ちにけり  
いろいろの鳥の声する刈田かな  
落葉踏むひと足ごとに昼深し  
鬼の子の顔だす空の明る過ぎ

黄落やトロンボーンを抱へ来し  
物干の上の青空震災忌  
十六夜や一指欠けたる観世音  
早稲の香の真つ只中を来し子かな

ひとところ襖開けあり冬紅葉  
極月の山の秘仏に鐘一打  
磐座に生れし綿虫なり青し  
枝ぶりの松くぐりぬけかいつぶり

大鍋のしつらへてある霜の寺  
奥の院に水の溢るる神無月  
花八ツ手能楽堂の半びらき  
豆腐屋のラツパ遠のくしぐれつつ

束の間の転生なりし雪ばんば  
神還る夜目にも白き雲ながれ  
枯れゆけるものの影皆濃かりけり  
凧や川光りつつ海へ入る